

れた表現の中にみることができる。ここには、明治期における国家祭祀としての神道成立に遡りうる一貫した日本の政教関係概念が看取される。

パロールレベルでは、靖国神社側の論理、日本遺族会側の論理をはじめ、その時々々の政治的文脈の中で、政治的言論空間からインターネット上の書き込みに到るまでさまざまなディスコースが存在してきたし、今回政権与党となった民主党の政策では、近隣諸国との国際関係に配慮する観点から、無宗教の国立追悼施設の建設の推進が謳われている。

分析の視座を設定することで、よりラングレベルに存在する「価値緊張」を捕捉することで比較可能性に開かれた研究を可能にするための糸口を掴みたい。

新宗教のナシヨナリズムと敗戦の神義論

對馬 路人

新宗教が人をひきつけた魅力の一つとして人類救済や理想社会の実現への使命感を提供したことを挙げる事ができる。そして戦前・戦中期の新宗教の場合、それはしばしばナシヨナリスティックな性格を帯びていた。特に戦時期には愛国主義的な使命感が強調された。しかし敗戦という現実はどうした使命感を挫かせる。日本の新宗教の多くは、敗戦を前にして、その使命感の再編成を迫られたといえよう。愛国主義が強く、戦勝への

期待が大きかったところほど、その課題は大きかった。新宗教は敗戦の宗教的な意味をどう受け止め、戦後社会に向けてその使命感をどう再編成していったのか、戦後いち早く社会的に注目を集めた、璽宇と天照皇大神宮を事例に考えた。

両団体は街頭での忘我的なパフォーマンス、国民的ヒーローのリクルート、マッカーサーへの直訴などで注目され、敗戦のもたらした解放感や精神的混乱の象徴として見られた。しかしそれらの運動の内実を見る限り、国家の天皇制ナシヨナリズムの深刻な危機に触発され、新たな天皇制ビジョンを提起することで、使命感の再編成を目指した宗教運動と捉えるべきであろう。ただし両者の構想した世直しのビジョンやそれを追及する運動のスタイルには対照的ともいえる違いがあった。

璽宇（璽光尊）は戦時中はいくまで「唯一の忠臣」として天皇による世直しに力を振る存在と自らを位置づけてきた。しかし敗戦など社会的危機の昂進にもかかわらず、そうした訴えかけは容れられず、次第に現皇室や旧来の政治指導者への幻滅が深まっていった。ただしそれはかえって、世直しは自分たちが主体になるという自己使命感を高める結果をもたらした。璽宇は皇居とされ、璽光尊は「天子の代行」となり、更に「天子」になった。また、マッカーサーへの働きかけに見られるように、日本の指導層への幻滅から、外国人への期待が高まるなど、自民族中心の考えはむしろ相対化されていった。

ただし働きかけの対象は権威者や要人に絞るなど、一貫して上からの世直しを志向した。またその内部では宮中を模した儀礼秩序が定められ、璽光尊は御簾の奥に鎮座し、臣下の参内を

第14部会

じつと待った。

これに対し天照皇大神宮教の北村サヨは既に戦争末期から、日本の勝利を信じてつも、神憑りすると、聖戦の掛け声の裏で自己保身や利己的な利益追求に走る日本人の姿や、宮中の奥に隔離され民衆の苦境に手を差し伸べない天皇(制)への批判を強めていた。そして敗戦とほぼ同時期に、自ら天照皇大神を宿した肉体となったとの自覚に至り、聖戦の意味や天皇制のあり方の根本的な組み換えをめざす運動へ乗り出した。

その組み換えに関し、彼女はまず民族(日本人)や血統(万世一系)故に尊いという個別生得的性質の神聖化を徹底的に相対化すると同時に、そもそも聖戦を権力的、軍事的手段で行うことが根本的な誤り(「蛆のけんか」と批判する。その上で、問題はその人が神の心になう「肚と祈りと真心」、「無我」の持ち主かどうかであり、日本人が勝利すべき真の聖戦とはそうした心磨きの追求を巡る闘争であると、民族的使命感について再定義した。サヨは「神芝居」の「女役座」として街頭で説法し、あるいは日本全国、世界各地を巡教するなど、直接民衆の中に飛び込んでそのことを説いてまわった。